

る見通しはないが万が一つの望みをもって先生にお願いしたとのことでした。

また、九月二日の朝、恵比寿町満鉄配給所に中国人が押し掛け日本人と言いつ争いとなり、ソ連兵の警備中に我々六人が群衆に巻き込まれて銃撃を受け、六人中三人は無事脱出。人は現場で、足を撃たれた人は病院で翌朝死亡と聞かされ、三日目はおのれかと思うと眠れなかった。けれども、病院の適切な措置、同僚の手厚い看護で七十二日間で退院することが出来ました。

退院は出来ても寒さに向かう時節である。仕事も出来ず三月まで休む。その間給料で三日分の米を買うのがやっと。売る物とて無く貨車の荷卸し後のほきだめの大豆や高粱を食べ、食うや食わずの連日で体調は思うように回復せず病人同様で、二十二年一月佐世保に上陸、単身だから帰れたが家族がいたら二度と日本の土を踏むことは出来なかったでしょう。

引き揚げ後は村役場に勤め現在退職し、子供も独立し年金生活を送っています。

無念、帰国時に日本で長男の死

群馬県 田中正吾

満州国独立のため、十九歳で孫呉に志願兵で入隊（独立守備歩兵第十四大隊）、昭和十二年三月除隊、同月興安省の省公署に勤務し、その後、興安西省錦州省義興公署、終戦時は錦州省公署に勤務しておりました。

召集で臨江に八月十四日入隊、翌十五日召集解除、当日、奉天に集合させられ、軍用貨車で出発しるとの指令で、同僚を含めて十六人が出発したが、撫順駅で降ろされ、その後は各人で帰宅することになり翌日撫順から奉天まで歩き、翌日早朝、十二人先頭グループに入って行進しました。

先頭である私達は六時間ぐらいい奉天に着きました。が、あとで話を聞くと、後続のグループは現地人による暴徒が、大きな鎌等で襲撃して物を取り上げたりして、また数人の人が殺されたとのことでした。

満州煙草会社に勤務している知人がいましたので二、三日そこでお世話になり、奉天から錦州方面に行く貨車に乗車、錦州駅近くで降ろされ、やっとのことで家族の待つ家に帰宅することができました。

その夜から、暴徒の襲撃で銃声が遠くから聞こえてきてたいへんでしたが、さいわいにも近くにソ連部隊の司令部があり、治安の維持は保たれていたようでした。

司令部の高官の話では、ソ連部隊がいるから心配しなくとも良いとのことでしたが、司令部から離れたところでは、ソ連の兵隊が時計、指輪等の貴金属を手あたりしだい民家から持っていきました。

私は生活のために、旧陸軍の荷車を見つけだし、引越し荷物の運搬をして生活をしましたが、三か月で重労働のため体を悪くして休養、その後、今度は満人街から米を購入して公園で、米を売って生活をしのいで一か月後に、錦州市居留民会の渉外部で仕事をする事になりましたが、その仕事は他人ごとではなきたいへんでした。

一例を話しますと、時計毛布等を一時的に預かって保

管しておき、八路軍及び匪賊が家捜しをしないように私のところで渡してやる。

また婦人が外で干し物をしていると、その婦人と言うので、やむを得ず、以前に商売していた女にお願いして、家庭婦人が犠牲になるのを、防いでその場をしのいだことが多々。

私は渉外部に勤務していましたので、錦州引揚げも最後になりましたが、他の地域から引揚げ者が立ち寄る中継場所となりますので、残務整理をした後、最後の便でコロ島港に引揚げた。

コロ島から米軍貨物船で佐世保に入港、大勢の方々の出迎えでぶじ日本に着くことができ一安心、二、三日して引揚げ者仕立ての列車で出発したのです。

次の朝、静岡県の袋井駅まで来たところ長男が急に肺炎にかかり、途中下車のうえ、旅館を五、六軒探しましたが、あまりにも見すばらしい姿を見て相手にしてくれませんでした。

駅にもどり駅長さんをお願いして、日本医療団で診察していただきましたが、五時間後には帰らぬ人となって

しまいました。

まことにくやしう、残念至極ゆるせない気持ちで葬儀をすませ、三日後には、今度は私が急性腸炎で生死をさまようような大病にかかり、これを持ち越えて三か月後には全快しました。私達親子三人揃った家庭生活が始まったわけでありませう。

北満で女一人、三年生きた

群馬県 木村 ぬい

昭和二十年七月二十日、夫に召集令状がきてハルビンに入隊、私は出産のため入院し、産後の肥立ちが悪く、退院できません。赤子は十日目に死亡しました。

八月に入ると、まわりが急に騒がしくなり、部落の青年達は召集され、残された婦人達は、米や豆をいり、携行食を作り、本部に集合し、話あいをしたり、百姓をして働いたりして目まぐるしい生活をしていました。

ある日「ヤンジャンに集合」の連絡があり、そこへ行

くと、日本軍が白旗を振って大勢きたソ連兵に武装解除させられ、その際に発砲して二人の怪我人ができました。そのときが終戦だったので。

八月末、嫩江部隊に集合して「こんなに集めてどうせ殺すんだらう」と皆が不安でしたが、口に出ませんでし

た。
ところが予測とは異なり、殺されずにその軍官舎に住み、四か月近く生活をしました。一日二回高粱の食事をあたえられ、お腹がすいて、満人からおからを買って食べたり、部隊の梅干しや芋を拾って食べたりしました。

ある夜ソ連兵が部屋に侵入してきたので、私はカマスをかぶり、息を殺して荷物になっていました。またフットがなくて、夜中は寒くて眠れず、わらの中に寝ました。朝起きると髪の中にわらが入り、とれないで苦心しました。忘れもしない二十一年一月十六日、夕方本部に集合し、枕木の釘二本持たせられ、線路の敷設作業を二晩中させられた。

北満は寒くて、零下三十度をこすので、一歳から五歳